

《  
ご  
親  
族  
編  
》

《ご親族編》には、奥様をはじめご子女からお孫様まで  
ご親族の方々のご文章を収録させていただきました。

## 78 私の叔父さん

兵庫県宝塚市 尾崎 輝美

(榎本恵吾の姪)

なにか行き詰まることがあると画家を志した私のために書かれた叔父の文章をひっぱり出して読む。書いてくれたのは私が十八歳の時だったと思う。これが私の基本となった。ギリギリの精神状態の時は、これを写したりもする。

二年半前に突然、母（叔父の姉）が他界し、その半年後、叔父が逝ってしまった。母の時は大木が、叔父の時は巨木が倒れたような気がした。どこか深いところでなにか動いているのだなあと感じた。

叔父のことを想う事は同時に祖父母、私の母を含めた叔父の兄弟姉妹を想うことでもあり、それぞれの顔が浮かぶ。祖父は私が二歳の時、他界したので、顔は覚えていないが、私の一番古い記憶として、その背中が残っている。祖父はなにかと問題のあった人らしいが、新宮技芸学校という洋裁を中心とした学校を始めた人で、私はその祖父が黒板に向っているところを、そおつとドアの隙間からのぞき見たのである。この光景が一体何につながるのか、わからないが、私はこの古い記憶を大切に大切に持ち続けてきた。学校は住居とくつついていて、私の母がこの学校を継いだので、叔父の実家でもあるこの家で私も育った。今、例えばここは芸術的な雰囲気満ちていた。絵や音楽を愛し、小さな庭には幾種類もの植物が植えられていた。祖母も情操の豊かな人だった。この家を通過したという点だけでも、叔父も私もすでに共通のなにかを持っていて響きあったのだと思う。

他に私の知っている叔父の暮らした場所を追っていくと、八王寺、麻生、鶴川、そして宇治。どこも懐かしい。宇治では、ふらりと訪ねた私を一週間以上も泊めてくれた。寛大だった叔父はもとより叔母も、この自由な風来坊をいつも温かく迎えて下さった。鶴川では、誰かが捨ててあつた木の重い重いポロポロの本棚を私が欲しいと言つたため、どこかでトラックを借りて同じ鶴川に住んでいた私の下宿に運んでくれた。本当に面倒なことをお願いしてしまつたなあとつくづく思うけれど、私にとつては、叔父はこのような事を理解してくれる貴重な存在だった。今も使っているが、これが引越しの度に重く、ぐらぐら揺れ、「これも運ぶのですか？」というような顔をされる。愛すべきやつかいな本棚である。

叔父は独創的で突拍子もなく愉快で、なによりも雰囲気や大事にしていた人だと思う。

それにしても母も叔父も同時期に逝つてしまつて途方に暮れる。最後に大きく響いた叔父の声は本宮からの電話で、力強く「いつもあなたの絵を見ているよー」だった。

叔父さん、どうぞ向こう側でも楽しくやって下さい。きつと美味しいお酒もあることでしょう。あまり飲み過ぎませんように。

## 79 『無神』 そのものなる榎本恵吾先生

京都府宇治市

喜多 源典

(榎本恵吾四女の夫)

「あなたはこの本があると思ってるのかねっ!! この文字があると思ってるのかねっ!! この私がいると思ってるのかねっ!! 何で幽斎殿に来る必要があるんだねっ!! 何で私に個人指導してもらおう必要があるんだねっ!! あなたは神想観神想観というが、何で神想観する必要があるんだねっ!! 何で『生命の真相』やこの本を読む必要があるんだねっ!! そんなもの一切する必要ないんだよっ!! どうしてそう言い切ってるのか、次来るまでに考えてらっしゃいっ!」

この言葉は、平成十五年の四月に幽斎殿の写経室の一室にて、初めて恵吾先生と個人的に話しをさせて頂いた時に、恵吾先生が私に対して最初に発せられた言葉でした。

この当時、私は臨床心理士という専門職を目指して心理カウンセラーの仕事をしていましたが、人間本来真相そのものであるのに、自分自身も含め人は社会は世界はどうしてこうまでも不完全極まりない現象に溢れ尽くしているのか!という真相と現象の対立矛盾に心身ともに押し潰されていました。

そしてその苦しみが生き地獄のようにピークに達し、「もう自分には『ただただ真相のみに超入せよ』という道以外、自分が生きる道は残されていない。真相と現象の対立矛盾・分裂の問題をはっきりさせない限り、そこをごまかしたまま何事を為したとしても、自分に待ち続けているのは永遠に暗く虚しい地獄

ただだ」というところまで完全に追い込まれていました。そしてこの唯一残された道をはっきりさせる為には恵吾先生しかない！ 恵吾先生に師事するしかない！と決意しました。

平成十五年三月にはじめて宇治本山にて一般練成を十日間受け、練成期間中に幽齋殿にて恵吾先生より「葩さんさん」を頂戴し、読んだ感想を言いに来るように言われました。当時の私は「葩さんさん」を読んでも、喜びや感動が生じてくる一方で、どうしても喜びきれず納得しがたい矛盾や疑問が噴出し、そんな自分自身や真理に対する怒りで充滿しているような状態でした。その状態のまま、後日、先生にその思いのたけをぶちまけに行きました。私が感じた矛盾・疑問を立て続けに話し、「どうしても喜びきれない！」ことを言い終わった後、先生はスツと立ち上がるや厳しい表情で冒頭の言葉を話され、言い終わるや否やそのまま部屋を出て行かれたのでした。

私は恵吾先生から突然与えられた公案の答えが全くわからず絶望の淵に落とされました。知識としての答えならわかつています。しかし自らの魂の底から湧出する答えを全く見出すことが出来ませんでした。

その答えを見出すため、私は数日後から家を出て宇治周辺の安宿を転々としながら、幽齋殿で神想観実修と生命の真相を読むことだけを行おうと決め、毎日幽齋殿に通いだしました。そんな私を見て、先生は朝十時の神想観終了後に声をかけて下さるようになり、「あなたがここで一分一秒でも神想観してくれていることが、どれだけ神が宇宙が喜んでくれることか。これから神想観して少しでも気がついたことがあったら遠慮せずに私に言いに来なさい」と優しく温かく話して下さいました。

それから私は十時の神想観終了後にほぼ毎日話しをさせていただくようになり、そこでは度々、私が真理に対する矛盾・疑問を先生に激しくぶつけ、こちらにも真剣だったので先生が少しでもごまかすような答

えをしたら「いつでも絶縁してやる！」という思いで先生に對していました。

よく先生に怒鳴り上げるようにして質問をしていましたが、そのようにすればするほど先生は満面の笑みで実に嬉しそうな表情で「だから不完全と言える一切のものは無いんです。無いものは無いんです。：あなたのような人がいるとまた研修用の原稿を書かないといけないと思わせてくれて、こちらが元氣になつてくるよ！」と答えられるのでした。ごまかすどころか、寸分の妥協もない久遠實相一元のいのちを生き貫くことだけに全身全霊をかけてらっしゃる先生の計り知れない底知れなさをまざまざと感じました。

そのように幽齋殿に毎日通う生活を始めて一週間程たった頃から、何か幽齋殿のお役にたちたいと思い、先生が毎日朝八時二十分頃からされてる幽齋殿の廊下掃除を半ば強引に手伝わせていただくことになりました。その掃除の手伝いがきっかけで、先生は廊下掃除が終わると職員玄関側の長椅子に座つて、職員朝礼の時間までの約二十〜三十分の間、毎日「朝のミーティング」と称して私にミニ講話や討論を下さるようになりました。さらには十時の神想観終了後の約二十〜三十分の間、昼休みの時間まで私の相手をして下さるようになり、先生とのそのような有難すぎる時間の日々はそれからほぼ毎日約一年間続きました。

先生とのディスカッションでは私がどんな質問をしても、先生の答えは「無い無い無い！」一辺倒でした。ある時は私の質問が言い終わらないうちに、先生は顔を真っ赤にして唾を飛ばしながら「だからその質問自体無い！ あなたの言葉も無い！ あなたのその口も無い！ あなたもわたしも無いっ！ とにかく無い無い無いなんだよっ！」とまくしたてるように話されるのでした。

また私が「釈迦自身は山川草木国土悉皆成仏、有道非道同時成道と見えるからいいでしょう。また釈迦

に触れられた人は救われるからいいでしょう。でも釈迦に触れられなかったそれ以外の世界中の宇宙中の大多数の人はどうなるんです!? そこはほったからしにしたまま、釈迦一人で勝手に悟りの世界が見えたところで、そんなので何が嬉しいんですか?!」と先生に聞いた。たすように質問すると、先生は静かに「それはね…あなたの…『心が!!』…そう見えてるんですよ。…實在の世界はそうじゃないからねえ…そしてあなたのその『心』も無いんですよ」と答えられたのでした。何か論理や矛盾を超えた絶対の喜びに触れられたような気がしました。

約一年間、先生のそばで一緒にいさせて頂き、先生のどこまでも「實相独在」に徹しきった姿、これだけは「光明」とは言い切れないと思える現象的に難題の個人指導であろうと、すべて相手の方の「光明一元」のみを礼拝感謝して説かれる姿に真近で触れさせて頂いたことで、私が勝手に暗く狭く自己限定していた「生長の家なるもの」「實相なるもの」「實相と現象の対立矛盾」に静かに大きく地殻変動が生じ始めました。

どんな不完全な現象であろうと現象は無く、一切現象を超えた「實相独在」「光明一元」のみが本当の眞實在なのだという驚天動地の無限奇蹟がまさか無限の当たり前さでもって今、今、實在し続けていくくれるのかもしれないという喜び・感謝の萌芽が芽生え始めていました。

幽齋殿に通い始めて、四カ月経つた頃の七月のある日のことでした。その頃、私は幽齋殿に歩いて通える範囲にある安いアパートを借りて毎日幽齋殿に通っていました。アパートを借りてるとかその場所について先生に聞かれてもはつきりと伝えていませんでした。「絶対的に正しい道を歩んでいる」と思う一方で、仕事もせず家を出て家族に大変に迷惑をかけてまでしている生活にどこか後ろめたい気持ちもあった

からでした。

その日の午後だったと思うのですが、アパートのすぐ近くを歩いていると突然前方の車からクラクションが鳴り、ふと見てみると偶然にも先生の車でした。「で、結局あなたはどこに住んでるんだねえ？」と先生に言われ、仕方なく場所を指し示すと「なんだっ、妙子の工房の近くじゃないかね。今から一緒に工房に行こう！」と言われました。私が「えっ!? いいですいいです」と拒否しても、かまうことなく先生は「いいからいいから行くんだよ」と話され、結局一緒に工房に行つたのでした。それが恵吾先生の四女である今の私の妻との初めての出会いでした。

たんとんと作陶する彼女と工房全体から醸し出される雰囲気は何か落ち着き、くつろげるものに包まれていると同時に、どこか恵吾先生と同じ、力の抜けた温かくぬくもりのある満身に満ちた創造的なエネルギーが静かに充満していました。それからというもの、昼休みの時間に工房に通われていた先生のお供をほぼ毎日することになりました。

幽齋殿での研修がほぼ一年経とうとしている平成十六年の四月のある日のことでした。現象を超えた「實相独在」の喜び・感謝が他人事ではなく自分のこととして徐々に感じられていた一方で、どうしても喜びきれない「何か」が残っていました。その「何か」が日に日に巨大になり、私が立ち上がれないほど押し潰すように重く重くのしかかっていました。

そんなある日の早朝三時頃だったかと思えます。早くに目が覚め、重い気持ちで悶々ともがき苦しんでいると、不意に私の心の中に「榎本恵吾先生は無しだあっ!!!」という直観ともコトバともいえないものが私の全身全霊を貫きました。その瞬間に自分の理性や意志では全く制御不能な得体の知れない衝動が強烈に湧き上がり始めました。何の理由もないのにただただ嬉しくて嬉しくて有難くて有難くて飛び上がり

たくなりました。

一分でも早く幽齋殿での早朝神想観に行きたいと勝手に体が動いて幽齋殿に向かっていました。神想観をしていても幽齋殿の下方から私の全身の毛穴一つ一つを通って、何とも形容しがたい喜び感謝智慧愛礼拝調和創造すべて渾然一体の無限生命が上方に尽きることなく噴き出すように湧出し続けました。自分の体がどうにかなうてしまおうんじゃないかと怖くなるほどでした。神想観中に大声で叫びたいほどにどこまでも有難さが突き上げてきました。

早朝行事が終わり、いったんアパートに帰り、再び朝八時前に幽齋殿に徒歩で向かいました。尽きることない喜びと有難さに満ち満ちたまま、歩きながら天空に浮かぶ太陽を見上げると、「あの太陽は寸分の狂いもなく自分そのものだあつ!!」「天空はそっくりそのまま（自分なき）自分の生命の歓喜そのものだあつ!!」と自分の肉体が破裂して弾け飛びそうなほどに嬉しさと有難さがどこまでも湧出しました。

同時にその喜びは太陽や天空、さらには宇宙をも突き破って、「宇宙遍満に永遠に光り輝く宇宙を創造しめた宇宙本源なる久遠實相なるいのちそのものが自分だったつ!!」「生長の家の前から、雅春先生の前から、そして恵吾先生の前から、あらゆるものの前の前から實在あ在り続ける『實相独在』のいのちそのものが自分であつたつ!!」ここに久遠の生長の家があり、ここに久遠の雅春先生も久遠の恵吾先生もいらつしやつたのだつ!!」という絶対歓喜・感謝が尽きることなく湧き上がりました。

周りに見えるすべてのすべてが祝福歓喜の輝きを放ち切っていました。私の両親や妹にもご先祖様にも、これまで関わったすべての人々にも私の過去すべてにも、天地一切すべてにもどこどこまでも感謝の気持ち湧き上がり続けました。

幽齋殿にて、この喜び・感謝を先生に伝えると、先生は「早朝行事が終わって（七時過ぎに）蓮華（寮）」

に帰ろうと、車で本山の坂を下って道に出たら、真つ青な青空が空一面に見えてねえ。そしたら『この底の底の底の底から晴れわたった青空は喜多君だあつ！』って感じたんだよ。不思議なものだねえ」と静かに喜びを湧出しながら話して下さいました。そして「これで幽齋殿（での研修）は卒業だね。これからは毎日の自分の生活の中で日々新しい喜びの発見をしていきなさい」と話されたのでした。この日は夜明けから日が暮れるまで一日中、雲ひとつない青空の一日でした。

翌日も幽齋殿にいつものように行くと、先生が嬉しそうに完成したばかりのワープロ打ちされた原稿『無の門關に座して』くく無、と言えるすべては無く、その無しも無くくくを見せて下さいました。この原稿を読ませて頂いて、よく先生が「神を見出したら、『その神も無し』としてすぐに超えないといけないよ」と話されていた言葉が甦りました。

「神は無し」：神は宇宙も人類もすべてのすべてを完全完成に創造されているながら、「私は一度も何にも為していませんよ」と無限に消えきって死にきって、すべてのすべてをただただ祝福礼拝して下さいている。真實在のいのちとは、その「無神」そのものなるいのちであることの澄み切った感謝・喜び・懐かしさに温かく包まれました。

先生は私が「恵吾先生は無し！」とする前の前から、自分は消えきり死にきって、ただただ「無神」の礼拝感謝でもって、私の内なる「無神」そのものなるいのちを拝んでいて下さったのでした。私だけでなく、すべての人々、天地一切宇宙一切の内なる「無神」なるいのちを先生はいつもいつも祝福礼拝して下さいましたのでした。

翌日の昼休みの時間に、いつものように先生とともに工房に行きました。妙子ちゃんの新作の作品の数

々が並べられていました。ふとその中の一枚の小皿が目にとまりました。目にとまったどころではありませんでした。見た瞬間に私の内から尽きることなく光明歓喜なるものが湧き上がり、その小皿から湧き出している光明歓喜なるものと全く同じものであると感じました。その小皿は先生の絵や書字は一切描かれていない彼女だけによる作品でしたが、そこに間違いなく「大太陽」「大ニコニコ」が無限に喜んでいました。工房を出てから、そのことを先生に伝えると「そのことを妙子に教えてやったら喜ぶよー」と満面の笑みで話されていました。

その一年後の平成十七年四月二日に、恵吾先生、一子先生、三人のお姉さん達とその家族のみんな、そして私の家族の温かい支えにより、恵吾先生の故郷でもある和歌山県・熊野本宮大社で私と妙子ちゃんは結婚しました。

結婚してもうすぐちょうど二年になります。臨床心理士の資格も取得でき、さらには誰にでも満面の笑みを浮かべる元気な長男が昨年十二月に誕生し、有難すぎる日々を送らせて頂いております。

先生は私が結婚して四ヵ月後に亡くなれましたが、「無神」そのものなる恵吾先生は、神界で『無神』そのものも無し、その無しも無し」と無限無神なるいのちの聖なる澄みきった光りを全人類、全宇宙に向かってますます輝かせて、大忙しの日々を送っておられることでしょう。

## 80 父からの贈り物

京都府宇治市 喜多 妙子

(榎本恵吾四女)

三十二歳まで独身だった末っ子の私は、二十五歳で結婚していった姉達三人よりも、数年多く父と母との三人暮らしをしました。大人になってからの父母の一人占めはとても楽しく、何よりの神様からのプレゼントだったと、今感謝いっぱいです。

特に陶芸の仕事で独立してから、父が亡くなるまでの約二年間は、毎日のように工房にやって来る父と、本当に沢山の時間を過ごしました。工房立ち上げの時には二人で信楽まで原料を買いに行ったり、父が板をのこぎりで切って道具を作ってくれたり……。昼寝をしたり、時にはお酒を呑んだりもしました。

初めての窯焚かまたきの朝には、早朝行事の前に工房に来て、窯に向かってお聖経をあげてくれました。展示会へ出品する前の作品が入ったダンボール箱にも、お聖経をあげてくれました。

私は父の温かな祈りの中で、いつも大安心で仕事をしていたように思います。

私の造った皿や花瓶に父は絵付けをしながら、「これを幸せって言うんだねー」とニコニコしながら言っていました。私に親孝行の喜びも与えてくれました。

まだまだ技術の未熟だった頃から、どんな作品を見せてもただただほめて喜んでくれる父がいたから、続けられていた陶芸でした。でも父が亡くなって、もう作品が作れないのではないかと思った時、気がつ

けば、そばにはどんな時も私の作品の一番のファンでいてくれる夫がいました。私は大きな夫の支えのおかげで、それまでどおり大安心で作陶を続けることができました。

結婚してもうすぐ丸二年になります。今では元気な男の赤ちゃんまで授かり、幸せな日々を送らせて頂いています。

「早く二人の赤ちゃんが見たいなあー」と結婚が決まってから毎日のように言っていた父。我が子を見てみると、たまにふと満面の笑みで喜んでくれている父の顔が浮かびます。

私達の結婚のキューピットになってくれた父。

最後に大きな大きな幸せを残して旅立ってくれた父。

お父さん、本当に有難う。

## 81 声

京都府宇治市 小林 信恵

(榎本恵吾三女)

「生まれた当時、姉妹四人の中で一番声が大きかったあなたですから、笑い声もきつと一番大きい筈であります。幸せでした。ますますお幸せに。 父」

父のこと、そして父との思い出：あまりに大きなテーマに、一体何をどう書けばいいのだろうか？ と思っていた。きっかけになればと引つ張り出てきた、結婚式の朝に家族から送られた寄せ書き。最後に見たのはいつだろう…。なんとなく思い出してダンボール箱の中から出し、読んでみた。涙が溢れた。私の声が大きかったことなんてすっかり忘れていた。

物心ついた頃からずっと、私は自分が一番父に近いところにいると思いついでいる。ひとつの部屋に家族六人が三枚の布団で寝ていた頃も、ふたりの姉、赤ちゃんだった妹と母、私と父という組み合わせだった。家族で外出する時、私と手を繋いで歩いてくれたのもいつも父だった。姉ふたりと、小さい妹の間で、不機嫌になりがちだった私を散歩に連れ出してくれたりもした。

そんなふうに父と過ごしてきたせいかな、叱られても他の姉妹をかばうようにして私だけ強気で父に向か

って行ったし、父を恐いと思ったこともなかった。

小学生の頃、お酒を呑む父が嫌で、押入れや下駄箱にお酒を隠したことがあった。「ダメ！」と睨みつける私に、「のぶちゃん、お酒、ちよつと出してきてよ」と、あのにこにこでもなく、にやにやでもない何とも言えない表情で言うので、私もつい笑ってしまつて固い決意もどこかへ行つてしまふのだった。

多感で悩みの多かつた学生の頃は、何を相談しても「そのまま最高！ 素晴らしい！」と言つてくれた。しかし当時、もつと具体的なアドバイスや劇的に意識がパツとひっくり返るような宗教的な言葉も聞きたかつた私は、その言葉に少し物足りなささえ感じていた。しかし父の言葉は、私が大学を卒業し社会人になつてからも、そして結婚についての相談の時にも「そのまま最高！ 満点！」と全く変わらなかつた。

寄せ書きをもらつた時、父からのメッセージとそこに大きく描かれた見慣れているはずの「ニコニコ」を見て、いつも父からの具体的な言葉を求めていた私は、大きな愛とたくさんの祝福を絶えず父からもらつていたことに気付き、わんわん泣いて目をはらしたまま、義兄が運転する車で結婚式会場となる教会に向かつたのを覚えている。

中学生くらいからか、だんだん性格が形成されていくとともに、私はどちらかという小さい声の人になつていった。人の前に出て話すのが嫌いで、出来る限りそういう役回りから逃げてきた。

ところが、結婚してからはどういう訳か、町内会に始まり幼稚園、小学校の役員など人前で話さなければならぬ役を次々と与えられ、司会をしたり挨拶をしたりする機会がほんとに多くなつた。人前に出る

と極度に緊張するので、その度に「私は声が大きいんだ！」とそれだけを自分に言い聞かせていたような気がする。

でもよく考えてみると、今でも知らず知らずのうちに笑ったり、怒ったり、子供を叱ったりと感情を爆発させる時には、自分でもびっくりするほど大きな声が出る。そういえば、結婚して間もない頃、何かを父に相談した時に、「どんだんのびのび怒ったり泣いたりしなさい。真相はビクともしないんだから。」と強い口調で父に言われたことがあった。

しかし、私の性格がどうであれ父がなんと言ってくれようが、私の大きな声はどうにもならない。なぜなら、私の声の大きさは父親譲りなのだから。

## 82 手廻しオルゴール

京都府宇治市 小林 努

(榎本恵吾三女の夫)

義父が亡くなってもうすぐ二年。

今、義父の創った数々の曲の中から『日はやさしく（光を喜ぶ歌8ツ）』を編曲して手廻しオルゴール用の専用シートの五線譜に書き込みパンチで穴を開け、CD音源を作るという作業をさせていただいていきます。

義父が亡くなって程ない頃、義母が長浜への小旅行の折に偶然見かけて買って帰られた手廻しオルゴール。『お父さんが好きだと思って…』と義母がぐるぐるとハンドルを回していた姿がとても美しかった。僕はインターネットで作曲用のシートがあることを突き止めそれを相当数義母に買ってもらいました。これですべて義父の曲をオルゴールで演奏できるようにします、と豪語して。

最初に手がけたのは蓮華寮の義父の玄関に額装されて掛けられていた一曲。『偲ぶ会』に間に合ったのはこの一曲のみでした。

義父が亡くなってすぐ義母より預かったメモ帳数冊、そこにびっしり義父の手によって書かれたカタカ

ナの列を譜面にしていく作業、これはこのメモを書いたときの義父を追体験することにもなり直に義父の頭の中を覗き込んでいたような感覚にとらわれるほど僕にとって濃厚な体験となりました。しかし、『僕がやります』と請け負った当のこの僕は、到底義父の頭の中に入り込んで作品を形にしていく体力など持ち合わせず、結局やりかけたままのメモ帳が二冊と手付かずのメモ帳が数冊、今も僕の部屋の本棚の上に置いてあります。

我ながら嫌になるほど怠惰な僕を責めるどころか労わってくれ、やっと出来た物に全身全霊を込めて喜んでくれる義母と家族、そしてその声が聞こえてきそうなほど喜んでいる義父。あと四曲なんです。最後はピアノでばっちり決めますから。

## 83 おじいちゃんとの思い出

小学五年 小林 奏子<sup>かなこ</sup>

(榎本恵吾三女の長女)

私は、妙子ちゃんの結こん式で、くまのに行つたことがとても強く頭に残っています。妙子ちゃんの結こん式が終わつて、妙子ちゃんと喜多さんが二人で旅行に出発した後、私は熱を出しました。とてもしんどかつたのでねていました。目が覚めると、おじいちゃんがおいのりをしながら足をさすつてくれていたのです。私はしんどかつたけれど、もう治つたような気持ちになりました。たまに、おじいちゃんが足をさすつてくれていたということを思い出すときがあります。うれしかったです。

私は、おじいちゃんと最後の旅行を覚えています。あわじ島へ行つた時のことです。私のお父さんとお母さんと妹の唯子とおじいちゃんとおばあちゃんと六人で行きました。あわじ島で私たちは、海へ行きましました。わたしはびつくりしました。クラゲがどこもかしこもとってもたくさん陸にうちあげられていたからです。私は気持ちが悪く思いましたが、おじいちゃんはそれを楽しんでいました。私はそれを見て感じました。おじいちゃんは、クラゲをつえでつついていました。つえでつつくと、クラゲはむくむくと動いたり、全く動かなくなりました。

おじいちゃんなくなる前くらいから、学校でなぜかいいことが続いていました。友達となかよくなれ

たり、あまりしゃべったことのないような子が「バイバイ」と言って声をかけてくれたりしました。その時は、なぜかいいことが続いているなと思っただけでした。でもおじいちゃんがなくなってしまったて、お母さんにこの話をしてみると「きつとおじいちゃんはもうわかっていたんだね。」と言っていました。

おじいちゃんはまだ若いのになくなってしまったけど、この短い間にふつうの人の一生分を生きていたんだなと私は思いました。もしかすると、ふつうの人の一生分以上のことをしていたのかもしれないとも思いました。

私はおじいちゃんがなくなってしまうって、ただ悲しいのではなく、これから、おじいちゃんがついていけるから自信を持つとうと思います。私は、この作文を書くことができうれしいです。

## 84 おじいちゃんといた時

小学五年 高塚 もと基

(榎本恵吾次女の長男)

ぼくは静岡に住んでいるので、ぼくがおじいちゃんの家に行けるのは大きな休みだけでした。でもその短い間にもいろいろな思い出があります。おじいちゃんが作ってくれるそうめんはとてもおいしかったです。あとおじいちゃんはいつもするめや魚をおいしそうに食べていました。それをぼくにも食べさせてくれました。いつもよりおいしい気がしました。おじいちゃんは食べている魚を絶対に手を使わないできれいに食べているのがすごいなと思いました。

三年生の時、ぼくは春休みの宿題をなくしてしまいました。でもその宿題がみつかりますようにと、おじいちゃんがいのつてくれたので、CDプレーヤーのうしろからその宿題が見つかりました。その時ぼくは、おじいちゃんはずごい人なんだと思いました。今でもさがし物があるとおじいちゃんにおねがいします。

おじいちゃんが亡くなってしまったから、ぼくは時々おじいちゃんといた楽しい時を思い出します。おばあちゃんちに行ったら、おじいちゃんのおぶつだんにおいのりします。なんでおじいちゃんは亡くなってしまったんだろうとぼくはいつも思っています。

## 85 おじいちゃんに思うこと

小学三年 高塚 あまね 周

(榎本恵吾次女の次男)

おじいちゃんはぼくの名前をいつもいい名前だと言ってくれました。ぼくがまだお母さんのおなかの中にいた時、おじいちゃんが、「こんど生まれてくる子の名前は周（あまね）です。」とみんなに伝えてしまつて、お母さんがおじいちゃんにおこつたというのを聞きました。おじいちゃんはすぐうれしかったんだと思います。

おじいちゃんは、ぼくがあそびに行くと、家の中でおいかけっこをよくしてくれました。おじいちゃんがだまつてゆつくりおいかけてくるのが、こわくておもしろかったです。

おじいちゃんのねているへやに入ったら、ハーモニカが三つぐらいありました。おじいちゃんがそれをふいてくれました。すぐくうまかったです。おじいちゃんはとても気持ちよさそうにふいていました。

おじいちゃんはいつもぼくたちが夜ごはんをたべるころにねていました。だから今でもへやでねているみたいに思うときがあります。だからいまもみんなといっしょにいるんだと思います。

## 86 ぼくの名前と思い出

小学五年 渡邊 創<sup>はじめ</sup>  
(榎本恵吾長女の長男)

ぼくのはじめという名は、おじいちゃんがつけてくれた名前です。名前の意味は、はじめからすばらしいという意味です。いとこ七人いた中でおじいちゃんに名前をつけてもらったのは、ぼくだけでした。それに、おじいちゃんは、ぼくの名前で曲を、作ってくれました。それは、なんと四十八曲ありました。『はじめのはじめ』という楽譜になりました。ぼくは、それをきいてとてもうれしかったです。

ぼくが、おじいちゃんに、「散歩に行こう」というと、いつも「いいよ」と言つて、ぼうしをかぶつて来てくれました。行くところは、いつもきまつて塔の島でした。いつもじつとして魚を見ていました。魚とにらめっこをしているようでした。ぼくは、となりでたにしをつかまえてあそんでいました。

ぼくがけんどうを、ならいはじめてからは、竹刀をもっていつておじいちゃんとすぶりの練習をしました。

ぼくが、「かたぐるまをして」と、言うと、いつも「ほれ、乗れ」と言いながらしゃがんでくれました。ぼくは、かたぐるまをしてくれるときは、心がウキウキしました。

時は平成十七年七月十二日の八時二十八分。おじいちゃんが亡くなった。みんなでわんわん泣いた。そして、今でも宇治川の魚をじつと見ていると自然と涙があふれてきます。

楽しかった祖父との生活。それがなくなるとちよつときびしい。

## 87 大好きなおじいちゃん

中学一年 渡邊 清子<sup>すずこ</sup>

(榎本恵吾長女の長女)

いつも私がおじいちゃんの家に行くと、「よく来たね。」と言って、私が大きくなってもだき上げてくれました。そんなおじいちゃんが大好きでした。

私がピアノを弾いていると、「上手だね。もう一回弾いて。」とほめてくれました。

あるときおじいちゃんといっしょに、おじいちゃんがリングスケッチブックに描いた、絵や歌を見てみると、「清(すず)ちゃんとはあちゃん(弟)にノートあげるから描いてごらん。」と言われ、ナスの絵や風景の絵を描こうとしても、力が入ってしまって、おじいちゃんのようにうまく描けませんでした。おじいちゃんはそれを見て、笑っていました。それは一年生ぐらいの時でしたが、まだそのノートを大切に持っています。

そして、私が四年生の時、ソプラノリコーダーをなくしてしまって、おじいちゃんに「リコーダーなくしちゃったんだけど、みつかるように祈ってくれない？」と電話をしたら、「うん、分かった。祈るとくよ。」と言って祈ってくれました。それから一週間たつてもみつからなかったので、楽器屋さんに行きました。でも、どの楽器屋さんもしまっています。そして、次の日も家でリコーダーを探していましたがみつかりませんでした。それで母がおばあちゃんに、そのことで電話している時に、弟の机の

あたりでリコーダーをみつけて、「あつたろ。」と言っていました。あとでおばあちゃんに電話をすると、「あつて良かったね。おじいちゃんがずっとお祈りしてくれてたのよ。」と言ってくれました。私は「ずっと忘れずに祈ってくれてたんだ。」と思つて、とてもうれしかったです。このとき、私は改めて、「お祈りの力はすごいなあ。」と実感しました。

おととしの春行われた、たえこちゃんの結婚式でのことです。熊野本宮の階段を上りながら私に、「きれいな良い所だね。清ちゃんの結婚式もこんな所で出来たらいいね。」と言ってくれました。私は今でもそのことをはつきりと覚えています。その日のお昼は、旅館で喜多さん家族といっしょに食べました。その席で、お母さん達姉妹とおじいちゃんおばあちゃん「埴生の宿」などの曲を合唱したり、おじさんといっしょでギターの弾き語りをしたり、おじいちゃんは楽しそうにお酒を飲んでいました。そして、お酒が入ったおじいちゃんは上機嫌で歌を歌っていました。その時のおじいちゃんは、とてもうれしそうでした。そしていよいよ帰る時、おじいちゃんは、私の車で帰ることになっていたのです、おじいちゃんが大好きな「チエリビダツケ」が指揮するクラシックの曲を聞きながら、京都方面と神戸方面で、道が分かれるまでいっしょに乗って行きました。

この時がおじいちゃんと話した最後でした。

おじいちゃんとのなつかしい思い出は、たくさんあります。

私が物心がついたころ、おじいちゃんは、ごく普通の人だと思っていました。でも、お葬式にはあんなにたくさんの方が来られていたり、お葬式が終わっても、お墓やお仏壇におがみに来られているので、びっくりしました。それにお葬式の後、作品展みたいなのがたくさんの方が来られているのを見て、「おじ

いちゃんは、すごい人なんだなあ。」と思いました。だからおじいちゃんを誇りに思います。それから私が悩んだり、不安な時でも、いつでもおじいちゃんがついていると思えるので、安心して色々なこと取り組めるようになりました。これからも「いつもおじいちゃんがついている」と思つて、いろんな事にチャレンジしていききたいと思います。

## 88 久遠の實在

静岡市 高塚 久実

(榎本恵吾次女)

一七〇〇枚のハガキがあります。これは私が親元を離れ東京で一人暮らしを始めてから結婚するまでの五年間、私が帰省している間をのぞいた毎日、父が私あてに出してくれたハガキです。形式は裏面に「ニコニコ」と御聖経の一節があり表にはあて名と日付と丸で囲った父の名前、下半分にその日、本山であったこと、庭の草花のこと、家族のこと、飼っていた犬のことなど、他愛のない日常の様子が十行ほどつづられていました。父は朝ふとんの上で神想観をしたあとハガキを書き、藤原の祖父が早朝行事の前に本山のポストに投函し母がハガキを補充しておくという、今思うと夢のような連携プレーを経て、毎日私の元に届いていました。「今日はおじいちゃんと一緒にスキヤキです」「庭のみみじが色付きました」「本山の人と（自然薯）じねんじょ掘りに行きました」等、いつもそのハガキから季節を感じ、家族と触れ合い、何より父、そして神様と片時も離れていないという大安心をもらっていました。

父が亡くなり改めて父は出会った人すべてと百人百通りの付き合い方をしていたことを思います。それは家族も例外ではなく娘ひとり一人、婿ひとり一人、孫にいたるまでそれぞれ違った接し方、愛し方でした。そして二十歳から離れて暮らす私にはこの一七〇〇枚のハガキを残してくれました。父が私にあてた文章の中に「あなたがあなたらしく」ということばがよくありました。私は父にほとんど悩みを相談する

ことはなく、おそらく「私らしく」解決していたのだと思います。けれど、キリスト教の牧師を父に持つ主人と結婚し、父の引退を前に洗礼を受けるよう勧められたとき、私は実家の父に、「生長の家の素晴らしい教えを知っているのに、キリスト教徒にはなれない」と話しました。そして私は日曜日には主人と教会の礼拝に出席し、牧師である父の説教を聞いているのに、主人は生長の家の本も読まないし父の講話も一度も聞いたことがないと不満を父に打ち明けました。すると父は「純君（主人の名前）には何も付け足すものはないし、そのまま最高ですよ！」と言いました。そして講話を聞きに来てはいけないし、受洗をしないと許さないとまで言い、私に谷口雅春先生の「ヨハネ伝講義」を渡しました。その時賛美歌を幼い私達娘に教え、家族でコーラスし、私の結婚式の大きな礼拝堂で、教会員の誰よりも大きな通る声で、嬉しそうに賛美歌を歌っている父を思い出しました。主人と出会ってからキリスト教を知ったのではなく、父が「久遠の實在」から久実と名づけた私に受け継がれた、キリスト教への信仰と尊敬が、私の中にあるのを感じました。そして私はこの結婚を心から祝福してくれた、双方の両親に感謝をしつつ受洗しました。きっとこれが「私らしい信仰生活」なのだと思います。

その後、三人の子供に恵まれ、父は静岡に住む私たちの帰省を楽しみにしてくれていました。目を吊り上げ子供たちを叱っている私になぜか嬉しそうに「いいねえ。久ちゃんらしく思ったとおりやりなさい。間違いないんだから。」と言っていました。そしてなによりも主人の仕事での活躍を喜んでいました。

父の亡くなる一週間前、母の誕生日に電話をするためらしく父が代わり「今度はいつきてくれるかねえ。」と聞きました。八月にみんなで帰ると話すと「そうかね。みんなで来てくれるかねえ。」そのやり取りが父との最後でした。

父の告別式の次の日、主人はDVDで初めて山形教化部での父の講話を聞きました。その後主人は「真理の吟唱」を自分で買い通勤用のかばんに入れてあります。私は主人に父をもつとよく知って欲しいという以前のような不満ではなく、ほんの少しの淋しさを感じていましたが父は見事に、私からその淋しさをもきれいに取り去ってくれました。

父は父らしく突然昇天し、私は私らしく子供たちを叱りとばしながら父のいない今を生きています。

結婚式の前日に届いた最後の十枚のハガキを紹介させていただきます。

七月二十八日 ①

いよいよしめくくり、いや出発のときを迎えましたね。こんなうれしいことでこの便りをしめくくれることは本当に有難いことです。今夜、犬養道子の「新約・聖書物語」お母さんと二人で買いました。

七月二十八日 ②

夕方、下の玄関のところの六畳の障子張りをお母さん、実代ちゃん、妙子ちゃんと私とでしました。お母さんが、どうしても張りかえて行かないと心が晴れないらしかったのです。これはまっ白い、新しい出発をする久ちゃんのためだね、と話しました。信ちゃんはお母さんの髪の手入れです。

七月二十八日 ③

まっ白い障子の紙を見ているすと、その中から、あなたの生まれた時のことなどから、あなたがあなたらしい表情で浮かび出て来ます。やっぱり明るいですね。

七月二十八日 ④

あれは、榎本組（一度本部を辞めて勤めた会社）に私が居た時、上から信ちゃんまでの三人をつれて金町の方の現場に用事があつて行った時、金町の方の駅のホームで電車を待っていた時、あなたは長い三つあみを左右から上で結び合わせていました。ベンチに座つて私の顔を見てくれた時、本当にきれいな子だと想いました。

七月二十八日 ⑤

そして、それから色々と有難う。あなたがこの世に生まれて来てくださったこと、あなたの存在そのものが、光であり、よろこばしさそのものです。太陽はどこに行つても其処が昼なのですね。

七月二十八日 ⑥

「人間は宇宙生命の咲き出でた花である」と祝福されています。人間は一生、生まれてきた時から花なのです。花は自分が自分であることを限りなく満足し、よろこんでいるのです。花よめさん、花むこさんに本当によく。

七月二十八日 ⑦

何と言つても高塚君と一緒になれたこと、今までの全てはこの出逢い、出発のためにあつたのですね。純の純なるものがあなたにも輝いているからなのだと神に感謝しています。

七月二十八日 ⑧

そして高塚君を生んでくださったご両親に心から感謝でいっぱいです。高塚家のご先祖様にも心からのご挨拶の式でもあると出発の式のことを想っています。

七月二十八日 ⑨

人間はいづこより来り、いづこに行くのであるか。あなたはやがて素晴らしい生命を宿し、生み育てる時、なおいつそう神秘に心を動かされる。生命は自分で何かを知っているのだと想います。

七月二十八日 ⑩

書いているうちに十二時をとくに過ぎてしまいました。もうこれは七月二十九日の分ですが、⑩として出します。それではあなたらしくニッコリ笑って……。心からおめでとう。

## 89 父のこと、夫のこと

兵庫県神戸市 渡邊 実代

(榎本恵吾長女)

私が今の主人を「結婚したい人がいる」と言つて紹介したとき、父は一ぺんで彼を気に入つてしまい、大喜びだった。

「渡邊君はひと味がう。そのひと味が大きい。彼に会つたとき、実代ちゃんがお父さんのいいところを見て、そこを大事にして彼を好きになつたというのが分かつたから、ちつとも淋しくなかつたんだよ」

という言葉を、その後何回か聞かされた。

結婚するまでの三年余り、私には色々な波があつた。父が、生長の家でない先に嫁ぐ人に、よく『生命の真相』も、生長の家さえも置いていきなさい』と言つた言葉が、現実として自分に迫つてきた。

「生長の家」という信仰にもとづいた、世界一幸福で、唯一最高と思つていた榎本家を離れて、それまで否定してきた「唯物的で現実的、自己限定に支配された窮屈な生活に染まるのはいやだ」という思いから、生長の家でない彼が、本当に正しい半身なのか疑わしくなることがたびたびあつた。私は包み隠すことなく、そんな悩みを全て父と主人にぶつけていた。父の彼を信じる姿勢は一貫しているどころか、いつそう堅固になり、主人はいつも変わらず飄々として、柔らかく誠実だった。いくらかの不安の残る中、私はただ父の言葉だけを信じて、新生活に身を投じていった。

形の上での「生長の家」は置いていけたかもしれないが、結婚してますます、私の父への依存心は

強まった。子供を産んでからは特に、一途で極端なところがある私は、あり余る意欲で子育てに向かうため、逆に不安になることも多く、頻繁に電話して父に相談をしていた。

私は子供のころから病院に行った経験がなく、自分の子供たちを病院に連れて行くのも気が進まず、義務づけられている予防接種も殆ど受けていなかった。周りからは驚かれたり、脅かされたりして、不安がよぎることもあった。そんなとき父に相談すると、

「予防接種をしないで心配に思う気持ちを拭うために注射をするくらいなら、そんなことで揺るがないように、余計に信仰を深める方をやりなさい」

と言われた。父に相談をするときは、厳しいこともあったが、いつも心の深いところから納得し、よろこびがあふれてくるような答えが返ってきた。

ことあるごとに、父への「緊急110番」は続き、子供たちの失くしものでも心配事でも、二言目には、「おじいちゃんに電話しなさい」

で解決していた。

ところが、父が亡くなる半年前くらいから、父への「110番」が自然になくなり始めた。自分でも父は元気だし、少なくともあと二十年は生きていてくれるだろうと信じ込んでいた。それなのにふと、「これからはもう父には頼れない」というような思いが湧いてくるのが、不思議にも、不吉にも感じられていた。

七月十二日夕刻。何の前ぶれもなく突然末妹から、「父が心肺停止状態で倒れた」という電話があった。「やっぱり……、来るときが来た」

というあきらめのような決心のようなものに、一瞬にして全身をガードされたような感覚に包まれた。

「これなら、案外潔く父の霊界への誕生を祝福できて、切り替えも早く、さらなる明るい人生に進めるのかもしれない！」と思った。

とんでもなかった。

このまま「死ぬまで涙が乾くことはないのでは」と思うほど、父のいない世界に生き延びていく気になれなかった。亡くなってもなお、「お父さん、お父さん」とすがりついている私の傍らで、主人は、相変わらず常に安らかに私をいたわり、見守っていてくれた。

父が「自分と似ている」と言った主人……。 「一体どこが？」と、ずっと答えを求めてきた。父の影響は何より甚大で強烈だったはずなのに、その存在はいつも静かで無味無臭、無色透明で、どこにも濃いのがなかった。さわやかな風に乗って、父はいなくなってしまった。そこに残ったのは膨大な空虚さ。

ある日、ハッと気がついた。父と主人が一番似ているのは、私をつつんでくれるこの空気の色、主張のない自然で透明な空気だったのだ——と。

数時間前、母が携帯電話の待受画面に、父の描いた「ニコニコ」の下に「光明実相」という字がある写真を使っているのを見た主人が、とてもうれしそうに「この画像、自分（私）の携帯に送ってもらったら？」と言った。（本当に計り知れない人だ）と思った瞬間、父の顔が浮かんだ。

## 90 在りし日の面影

京都府宇治市 榎本 一子

(榎本恵吾妻)

### (一) 手紙

「お父さんへ

お早うございます。お茶の葉、新しいの入れておきましたよ。(そば茶) お湯、入れすぎない方がいいよ。たえこ」

午前三時頃起き出す父親と、朝、顔を合わすことなどはとても無理な四女が、リビングのテーブル上前夜、広告の裏紙に書いた、主人宛の手紙です。そして、香ばしいそば茶を午前三時頃飲んだ形跡を残して、その紙に「合掌。わかりました。父」と主人が書き加えて、私が目覚めたときは出かけていました。

私は、用は済んだものと、その手紙をくしゃくしゃにしてくずかごに捨てていましたら、「こんなうれしい大事なものを、何ということをして……」と言わんばかりに、主人は丸めたその裏紙に書いた娘の手紙に、アイロンをかけてしわを伸ばし、透明な「クリヤケース」に入れて今も、テーブルの脇に置いています。

今年一月九日、その日は私が東京の本部へ本部講師補の受験に行つて帰る日でした。そして、入れ替わりに主人は泊まりがけで講演に行く日になっていました。そんな訳で主人は留守でしたが、玄関に迎えて

くれた娘は、「はい、お父さんの置き手紙。一人で向こうで読んで泣き……」とからかうと、向こうへ行ききました。小さな紙切れに

「合掌 お母さん、ご苦労様でしたね。今日は宇治神社（二社）の正式参拝でした。ただただ祈っております。祈ることが幸せでした。満ち足りて欠くること無き満点を。」と書いてありました。昨日から、いえもつと前からの、そこはかとな不安と緊張で堅くなっていた心に、その小さな置き手紙は暖かく優しく染みわたり、涙に変わって、ありがたさが全身を包みました。

「欠くる事なき満点を」——行き届かないところだからで、精進の心も浅く、足りないところだらけの私を、いつもいつも「欠くる事なき満点なもの」として拝んでもらっている有り難さを、あらためて思いましました。

藤原の父と、四人の娘と、私たち夫婦と七人家族で、笑ったり、おこつたりしてにぎやかだったときは過ぎ、今は家族三人。しかも三人が仕事を持っていて、顔を見ないまま、一日が始まる日もあるくらいにあわたましい日々。用件だけの私の手紙にも、少しは心を添えましょう。主人からの置き手紙も、もう四五通になりました。

〈平成十二年八月内報『宇治』一三五号より〉

## （二） 誕生日を前に

「僕がどうして母さんの練成会の『神想観練習』のとき聴きに行きたくなるのか解ったよ」とある日、主

人が言いました。そうなのです。二年前、私が本部講師補にならせていただいて、練成会の『神想観練習』を担当させていただくことになってからずっと、主人は、私が話している大講堂の後ろのほうに座って、聴いてくれているのです。ほとんど毎回。

早朝行事が終わって、感謝行が終わって、家に一度帰るのが、七時過ぎ。それから、私の朝食につき合いながら、七時半から始まるBSの、朝の連続テレビ小説をみるのが大方の私たち夫婦の日課になります。『神想観練習』は午前七時半から始まるので、『神想観練習』のある日は私は家に帰れないまま、担当に入っています。主人は一人でお茶を飲むのもつまらないらしく、BSで今なら『さくら』を見て、それから八時頃から会場の大講堂に現れます。話している演壇から、車が大講堂前の広場に入ってくるのがよく見えて、話しながら私は、*“あ、来た来た”*と、やっぱりうれしくなります。

担当のはじめの頃は、*“慣れない私を応援するために心配で来てくれるのであろうか”*と違って、*“有り難いなあ”*と感謝はしていたものの、*“家でゆっくりしてくれればいいものを……”*と申し訳なく思うので、「今までは有り難かったけど、もう家でゆっくりしててくださいっていいわよ」といったものです。そんなとき、決まって「別に母さんのために行っている訳じゃない」といつも言うのでした。父兄参観付き『神想観練習』でした。

「へえー、理由がわかったの。どうして、来てくれるの？」と私。「そのうち書面で……」と夫。「もったいぶらないで、言つてよ」と私。「いやいや、いずれ……」となかなか言つてくれないのです。

最近の『神想観練習』のときでした。テキストの『詳説神想観』の間に、本からはみ出るくらいの紙がはさんであるのに気が付きました。開いてみると夫からの手紙で、

「僕自身、最近までよくわからなかったのですが、これはあなたに恋をしているからに違いない、とわかりました。」と書いてありました。一瞬、誰かがこのメモを見ないかと、恥ずかしさにドキドキして、そ

れからじわーっと……。

結婚三十六年、同じ年夫婦の私たち。二カ月お先に私、今月六十五歳の誕生日を迎えます。

〈平成十四年七月内報『宇治』一五八号より〉

### (三) リコーダー、探して！

「おばあちゃん、リコーダーが見つからないんだけど、おじいちゃんに祈ってもらって！」

三学期がはじまって少し経った頃の夜九時過ぎ、長女のところの四年生になる孫娘からの電話でした。三学期になって初めての音楽の授業で、リコーダー（たて笛）を使うということで、明日の準備をしていたところ、どうしても見つからなくて、今まで探していたというのです。失くしものが見つからないと、おじいちゃんに頼んで来て、祈ってもらってそれが見つかって、何度となく助けられていることにすっかり味をしめている孫たちは、また「なくしもの110番」に頼んできたというわけでした。

声の様子で、困っていることがよく伝わって来ました。持ち物を大切にしている反省が、自分を責めているようでした。私はつとめて明るく、「はい、わかった。今からおじいちゃんにお願いして、祈ってもらってあげるからね。おばあちゃんも祈るしね。必ず出てくるから、安心してね。」と、電話を切りました。

主人はすぐ、祈り始めてくれました。私も祈りました。少し経って電話をしてみたところ、「まだ見つからない」ということでした。

私は笛が出て来る、来ないよりも、十歳の孫娘の「祈れば神様は何でもきいてくださる」という「信じ

る心”をそこないたくない、という想いが切実でした。孫娘に「必ず出てくるから、安心してもう寝るよ」に」と言つて電話を切つたものの、「明日要るのに大丈夫だろうか？」と不安が頭をもたげてきました。主人は、私にも、もういいからやすむようにと言いました。私の祈りはまだまだ百パーセントではないのでした。主人は、私と孫娘と皆の全権を依頼されながら、不安そうでもなく、焦っている様子もありません。ただただ安らいで、神に祈っているだけでした。結果が気になつていいる私と、ただただ祈りを続けている主人と……。

結局、その日は出てきませんでした。孫は、担任の先生にお願いしてリコーダーを貸して頂いて、その日は切り抜けました。二日、三日、出てきません。三日目の夜、「今日、もうあきらめてリコーダー買いに行つただけけど、お店が全部休みで買えなかつた」と、母親である娘が電話で言いました。ああ、そうか、やつぱり……買うことにしたか……と思いつながら、娘と話しているその瞬間「あつたあー、リコーダーがあつた！」耳がつぶれるほどの大きな声で、娘が叫びました。泣き笑いとも聞こえる大きな声で、笑つていました。私と電話しながら目をやつたところに、あつたというのでした。

信じたり、あきらめたり、また信じなおしたりしていた私と違って、信じて祈り続けていた主人のおかげでした。はじめ、出てこなかつた日、主人は確かに「いやいや、祈りがきかれるのはこれからだよ」と言つたのでした。「いつまでに叶えて欲しい」というのは、人間の都合を先に立てた思いで、本当の祈りではなく、信じて祈り続けるとき、必ず一番よいときに祈りはきかれることを、また生活の中で教えられたのです。

〈平成十七年二月 『ネットワーク宝蔵』 一三〇号より〉

#### (四) 旅立ち・感謝

合掌 ありがとうございます。

宝蔵会の皆様とは、『ネットワーク宝蔵』の第一号発行の頃よりおなじみでありました、夫・榎本恵吾本部講師（祈願部長）が、平成十七年七月十二日、卒然として今世の使命を終え、靈界へ旅立ちました。

その日も、午前三時に自宅を出て、いつもの通り沢山の方の祈願をし、神想観をし、何もかもいつも通り終え、午後から自宅に帰りました。家族には体調不良のことは見て取れましたので、病院で診てもらったことをすすめましたが、明るい、安らかな表情で、「病気は出たら消えるんだから……」といって、「ありがとうございます。ありがとうございます。」と覚えておりました。家族や親しい人の、声をそろえての何度目かの聖經『甘露の法雨』の読誦が終わったところで、家族のものに食事をとるように言ったら、横になっていた身体を起こし、正座して「ありがとうございます。」と言っていたと思ったら、後ろへ倒れました。私の腕の中に倒れ込みました。救急車が来たときは、もう心肺停止していたであろうとのことでした。何もかもが夢の中の出来事のようにあり、私の心は納得のいくものではありませんでした。

平成十七年に入った頃から、何故か私の心に、私の父の故 藤原敏之（元本部講師）が、言っていたことばが浮かんでいました。

「現象ありと思っていると、整った現象ほどそれを失ったとき痛手は大きいよ。仲のよい夫婦とか、豊かな生活とか、現象が思うとおりにいって喜んでいような信仰では、足下をすくわれるときがくる。」私にとって幸せのすべてであり、存在のすべてであった主人との別れのこととハッキリはしていないながら、今のうちに、早いうちに「現象なし」を確立しておかなければ……とはやるような気持ちがいま

した。

家族を亡くして悲しんでいらつしやるご家族に、主人は決まって「満点の卒業です。喜んであげましょう。ほめてあげましょう。」と力強く言っていました。久遠生き通しのいのちを教えられていて本当によかったと、今、感謝でいっぱいです。

生長の家総裁谷口清超先生より、『實相光明宮榎森成大居士』という解脱名を賜りましたこと、心より感謝申し上げます。

この度のことを機縁として、私は「人間は神の子であり、霊的実在である」の自覚を益々深め、み教えの中に生かされているよろこびを、一人でも多くの方に伝えていきたいと、切実に思っています。そして、それこそがご恩に報いる道と、思っております。皆様から、生前沢山頂いたご深切、ご協力に心より感謝申し上げます。ありがとうございます。

〈平成十七年八月 『ネットワーク宝蔵』一三六号より〉

### (五) 冬を迎えて

鮮やかな色彩を放って宇治川の河畔を染め上げ、境内を色とりどりに飾った紅葉が散り、本格的な冬の到来を迎えています。『あれは夏だったな』と、私の身に起こった人生の一大事のことを、随分遠い日のことのように思ったりしています。

主人 榎本が、生長の家本部から出向という形で（三カ月の試用期間）、宇治別格本山にはじめて単身で赴任してきた日が昭和五十五年七月十六日。宇治別格本山の中講堂で葬儀・告別式をして頂いて宇治別格

本山最後の日になったのが、平成十七年七月十五日でした。それはきつちり、まるまる二十五年間が一日も欠けない年月でありました。四半世紀を宇治で過ごさせて頂き、働かせて頂いたことになりました。

子供のような単純さと、周りの人の心を傷つけることを極度に嫌った繊細なやさしいところと、言い出したらきかない、一筋縄ではいかないやつかいな性格を併せ持ちながら、楠本総務をはじめ周りの方達に許されて、毎日を味わうことと、曲をかき、文章を綴り、新しい発見に心をワクワクさせて、幸せに生かして頂きました。

昇天する前々日、研修生の人たちと一緒に、宇治川天ヶ瀬ラインの空き缶やごみ拾いの献労に参加し、大好きだった宇治川の景観に、お礼をしたのでしよう。蓮華寮の裏庭の掃除も、私に代わって丁寧に、きれいに二日前に仕上げてくれ、同じ日、散髪も終え、住まわせて頂いたところも、身体もきれいに淨めて終わりました。何もかも、主人の魂は知っていたのでしょいか。

二人で買いに行った夏のスーツは、昇天した日（七月十二日）に出来ることになっていました。「七月十七日の練成講話のとき下ろそう」——そう楽しみに話していて、とうとう袖を通すことなく終わった最後の晴れ着（人生はじめての黒のスーツ）は、自分のための喪服のように、使命を終えた身体を包んで、天にかえっていきました。長い間、皆様、本当にありがとうございます。合掌

はじめなく おわりなく

— 榎本恵吾先生追悼文集 —

平成十九年七月一日 発行

編集 榎本恵吾先生追悼文集編集委員会

(代表 岡 正章)

発行者 榎本 一子

《非売品》